

2011年3月11日、テレビの中継を通じて東日本大震災のニュースを知りました。大きな津波が次々に民家や車をのみ込んでいく様子に目を見張り、大変ショックを受けました。

時間が経つにつれて被害の大きさが明らかになるなか、避難先で過ごす人々の憔悴しきった表情が映し出されるたびに胸が痛み、これはとんでもないことが起こってしまったと恐怖さえ覚えました。

私自身は神戸にて阪神淡路大震災を経験しました。当時は震災直後から全国より駆けつけてくださった多くの方々に助けていただき、あたたかい声をかけてもらったことは今でもよく覚えています。それ以来、天災のニュースを耳にすると、「何か私にできることをさせてもらいたい」という気持ちに駆られます。この度は、被災地を訪れて自分の目で実態を確かめたい、そして少しでも復興のお手伝いができたらと思いました。

ツアーの中で最も印象に残ったのは、浪江町を訪れたことです。郡山駅から町へ向かうバスの車窓には、時折、「○マイクロシーベルト」と表示された放射線カウンターが目に飛び込んできて、除染物を入れた袋がいくつも積み重ねられている光景を目にしました。

未だ立ち入り禁止区域に指定されている町には、誰一人として歩いておらず、傾いた家や天井が崩れて落ちて屋内が散乱した家そのままの状態が残っていました。まるでぴたりと時間が止まってしまったかのような光景に息をのみ、言葉を失いました。また、小高い丘の上には新しく建てられたお墓が並び、海まで見晴らせる野原が広がっていました。元々、その野原は住宅地だったと伺い、「ここに人々の生活があったはずなのに」と、いたたまれない気持ちになりました。

町を歩いている最中、鮮やかに紅葉した木々や美しく咲いた花々に出会いました。人がいなくても絶えず季節は巡ります。一日でも早く、ここにまたあたたかな生活が戻ってほしいと願わずにはいられませんでした。

いわきホテルハワイアンズにて、福島大学の中井先生に伺った学生ボランティアのお話も印象的でした。学生たちは復興支援活動として、被災された方々に足湯に浸かってもらいながら「傾聴」したり、中には仮設住宅に3ヶ月間も住み込んで生活を共にしながら大学に通う学生もいらっしゃったそうです。私のように「何かしなければ」という思いばかりでなく、実際に何からでも行動に移すことの大切さを改めて教わりました。

震災から年月が経つほどに被災地の様子が報道されることも少なくなり、震災はもう過去のことだと言わんばかりに、世間では日々起こるニュースに埋め尽くされてしまいそうになります。けれども、遠方から被災地に出向いて作業に携わることのみが支援ではありません。実際に自分の目で見聞きしたことを伝えること、しっかりと現状を知って風化させないこと。そして、忘れずに思い続けること。これらも大切な支援の一つではないかと感じています。この度のツアーで学ばせていただいたことをできるだけ多くの人に伝えたいと思っています。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった立命館大学校友会のみなさま、現地であたたかく迎えてくださった福島県校友会のみなさまには大変感謝しています。この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。